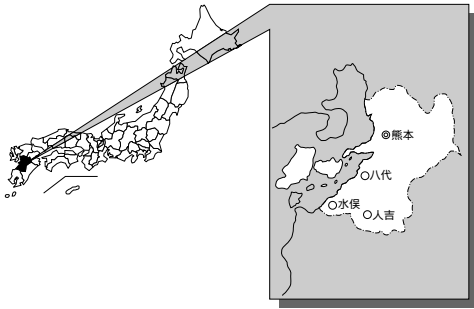


土木紀行

三角西港

熊本県宇城市



概要

熊本県宇城市三角町にある三角西港は、有明海に面した宇土半島の西端に位置している。

明治政府の殖産振興に基づき、明治17（1884）年に道路、築港の順で着工し、3年後の明治20（1887）年8月に開港した。

近代的港湾としては日本最古に当たり、宮城県の野蒜港、福井県の三国港とともに明治の三大築港と呼ばれている。

3港のうち、三角西港のみが現在も石積埠頭をはじめ、築港当時の施設がほぼ原形の状態で残されており、平成14（2002）年には国の重要文化財に指定された。

また、一帯は公園整備がなされ、開港当時の建造物も修復・復元されている。

三角西港の変遷

港をつくることにより、産業を発展させ、経済を向上させたいという、熊本県内の切実な願いに、当時の県令（知事）である富岡敬明を中心的な推進者として、明治16（1883）年に三角築港および道路建設が県議会で決定された。当初の築港予定は、現在の熊本市街地にほど近い百貫石港を改修するものであったが、内務省から派遣されたオランダ人技師ムルドルは、河口に位置する百貫



写真 1 石積埠頭

石は、流出土砂により大型船の水深確保が困難であるため、築港場所として不適當であると判断した。そのため、代替地として、有明海と八代海の間位置し、九州西海航路の要所にあり、また、港内が静穏で、水深が深く、暴風雨や波浪の



写真 2 上空からの三角西港

影響を受けないなど、地形的・自然条件的に優れた天然の良港である現在の場所を選定した。

明治17(1884)年3月に、まずは熊本と三角を結ぶ道路工事に着手し、同年5月から築港工事を始めた。3年後の明治20(1887)年8月15日には約30万円余(現在の金額で約35億円)の国費を投じて完成させた。

明治22(1889)年には、米、麦、麦粉、石炭、硫黄の特別輸出港に指定され、県も税的優遇措置や郵便船を寄港させるなど港の発展を奨励し、三角西港はますます栄えていった。

しかし、静穏なはずの港は、開港当初から木造の浮き棧橋が、台風や荒波でたびたび損傷し、潮流も思いのほか速く、船がうまく着岸できないことが多かった。

加えて、当時三池炭坑からの石炭を三角西港と、口之津港で取り扱っていた三井が、2港使用することにより2回の税関検査の手間が生じることや、三角西港の港利用料の値上げなどにより、明治30(1897)年に石炭積出港として口之津港を再整備する方針としたため、三角西港での石炭輸出は次第になくなっていった。

さらに、明治32(1899)年には、熊本市街地から40km余りも離れているなどの難点を解決するために鉄道が敷設されたが、地形上の理由などにより、三角西港までは敷設されなかった。また、その後の延伸計画も実現することがなく、現在の

三角東港が終点の駅となったことから、三角西港は、国の重要港としての役割は次第に衰退し、三角東港の整備が進むこととなった。

大正時代に入ると、陸上の物資輸送が円滑でない三角西港で荷役する船はますます減りはじめ、三角東港を利用する船が増えていった。そのため、以後、三角東港の施設拡充は盛んに行われたが、三角西港が開発の対象となることはなかった。

しかしながらそのことが幸いし、土木遺産のような歴史的な土木構造物での観点から見ると、三角西港は石積埠頭をはじめ、築港当時の施設がほぼ原形の状態に残されており、築港100周年の昭和58(1983)年を契機に、その存在意義が見直され、開港当時の建造物復元や、一帯の公園整備がなされ、観光地として再び脚光を浴びることとなった。

三角西港の文化的価値

三角西港は、港湾都市として背後地を含めた一体的な整備が行われていることが大きな特徴である。全長約756mの石積埠頭の隅角部は曲線形状となっており、高度で緻密な石積みと相まって、大変美しい。また、周辺の丘陵地と市街地の境界には石積みの環濠が設けられ、周辺から流れ込む水を受け止め、一直線に海に向かう排水路に集め

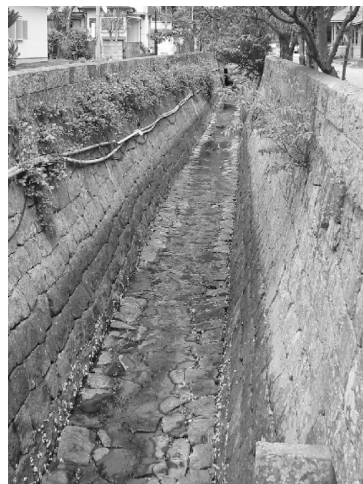


写真 3 排水路



写真 4 環濠

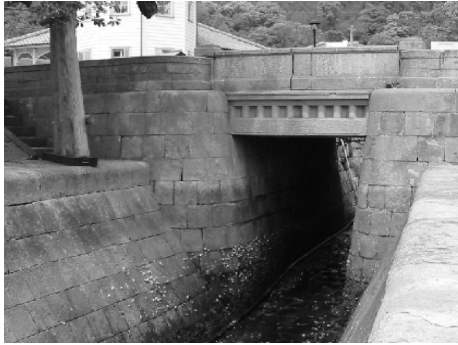


写真 5 石橋

て流すことにより、市街地を水害から守るようになっており、これら環濠や排水路は、潮の干満を利用して水路内が自然に浄化されるように勾配が工夫されている。

明治の三大築港と呼ばれている3港のうち、三角西港のみが明治期の港湾施設がほぼ完全な姿で現存しており、大変貴重な土木構造物である。

これらの価値が高く評価され、平成13(2001)年に日本土木学会から「選奨土木遺産」に選ばれ、平成14(2002)年には石積埠頭、東西の排水路、4基の石橋が国の重要文化財に指定されている。

三角西港の現状

築港100周年の昭和58(1983)年を契機に、三角西港の歴史的港湾施設の保存・復元計画が策定され、昭和60(1985)年から始まった港湾環境整

備事業により、宇土郡役所、三角海運倉庫、龍驤館、ムルドルハウス、浦島屋などの歴史的建造物が修復・復元されるなど、かつての明治の港湾都市の姿の再現が、熊本県や宇城市により取り組まれている。

また現在、世界遺産登録に向けての取り組みが進められている。

現在の三角西港には、かつての貿易港としての賑わいはないが、地元の努力により貴重な土木遺産が保存されるとともに、歴史的な建造物が修復・復元されたことにより、観光地として賑わいを取り戻している。

【参考資料】

「三角築港の計画と整備」熊本大学 星野裕司、文化庁 北河大次郎

「港湾遺産」社団法人日本埋立浚渫協会

「Civil Engineering Consultant」Vol 238

「日本土木史探訪 人は何を築いてきたか」土木学会編、三海堂

【資料提供】

宇城市教育委員会文化課

【写真提供】

写真 1, 2 宇城市教育委員会文化課

写真 3, 4, 5 サイト名：三角西港物語

写真 6 国土交通省九州地方整備局熊本港湾・空港整備事務所

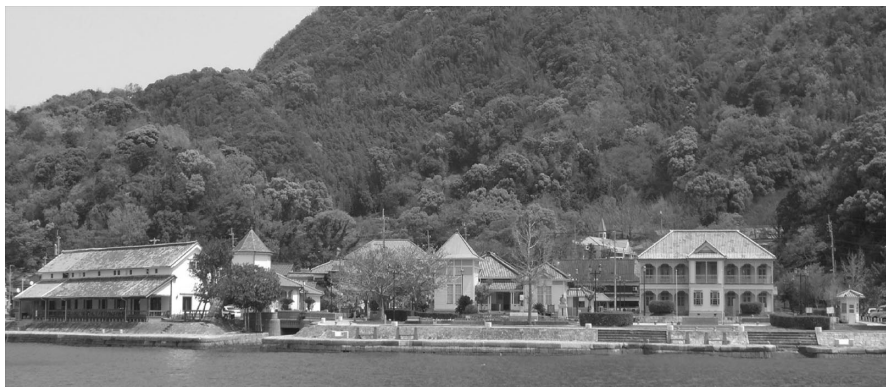


写真 6 海から見た現在の三角西港